

Title	慶應義塾塾歌と富田正文：歌詞にこめられた意味
Sub Title	Keio school anthem and Tomita Masafumi
Author	山内, 慶太(Yamauchi, Keita)
Publisher	慶應義塾福沢研究センター
Publication year	2016
Jtitle	近代日本研究 (Bulletin of modern Japanese studies). Vol.33, (2016.), p.131- 162
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	小特集：新塾歌制定七五年
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10005325-20160000-0131

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

慶應義塾塾歌と富田正文

——歌詞にこめられた意味——

山内慶太

一 はじめに

今日の塾歌が発表されたのは、昭和十六（一九四一）年一月十日の福澤先生誕生記念会の席上であった。この日は、例年と異なり開会を午後六時とし、会場も、学生を多数参加させることから三田山上の大講堂であった。会は、文学部教授野口米次郎による講演、塾長小泉信三の講話、社頭福澤八十吉の挨拶の後、新塾歌が発表された。発表に際しては、まず作詞者富田正文が挨拶し、次いでワグネル・ソサイエティーが、編曲者大塚楠雄の指揮でオーケストラの演奏と斉唱を行った。その後、参加学生が全員起立して、塾員も一緒に、数回斉唱の練習をした。また、午後七時半から学部校舎（第一校舎）の二階の二十一、二十二、二十三番教室で

ティーパーティーが催されたが、両側の教室の間の中央部分では、ワグネル・サイエティーが演奏し続け、最後に再び学生全員で数度斉唱したのであった。

以来、七十五年を経て、塾歌はすっかり義塾社中の間に定着している。そして、酒席の場でお酒が入ってからは歌わないというような慣習も広まったように、他のカレッジソングとは異なる特別な歌として尊重されている。しかしその割には、作詞者の富田正文が、一番、二番、三番のそれぞれの歌詞で、何を表現したのか、どのような意図を込めたのかということ余り知られていない。また、それを解き明かし説明する文献も殆ど無いままである。そこで、本論文では、まず富田が作詞をするに至った背景を、特に当時の塾長小泉信三との関係で見てみたい。次いで、塾歌の歌詞の一番、二番、三番、それぞれについて、塾歌制定時に富田が記した「塾歌に就て」を手掛かりに論考したい。更に、その歌詞の持つ意味をより明かにするために、その当時の時代の雰囲気についても示したい。

二 富田正文作詞の経緯

「天にあふるる文明の 潮東瀛しほとうりやによる時」ではじまる旧塾歌が制定されたのは明治三十七（一九〇四）年である。以来、二十余年を経て、「新時代の青少年学徒の生活感情にピッタリ適合し、香り高く雄渾な歌詞と曲とを求めて義塾独自の伝統的精神を統一表現しようとの議が興↑」¹ったのは大正十五（一九二六）年十一月のことであった。

それ以来、制定までに十四年を要したことになる。その間の経緯は、坂部由紀子氏の「信時潔作品の二つの

「慶應義塾塾歌」——二人の作曲依頼者 与謝野寛・小泉信三⁽²⁾に詳しいが、主に慶應義塾福澤研究センターで所蔵する『昭和二年一月 塾歌関係書類 塾監局』と表紙に書かれた綴りにまとめられた資料を基に、富田正文に委嘱されるまでの経緯の概要を記しておきたい。

当初は歌詞を塾生から募ることとして、大正十五年十一月「塾歌懸賞募集」の掲示が出された。また審査委員は、板倉卓造、横山重、与謝野寛、高橋誠一郎、野口米次郎、正木俊二、小泉信三となった。板倉卓造は、政治学者で法学部を担うと共に時事新報を支えた人である。横山重は中世国文学者で予科の教員、与謝野寛は文学部で国文学を講じていた歌人鉄幹、高橋誠一郎は中世経済学史を講じた経済学部教授、野口米次郎は詩人で英文学を講じた文学部教授、正木俊二（不如丘）は作家で医学部内科学の助教授、小泉信三は経済学部教授で社会思想史などを講じていた。この委員会は後述の委員会につながるが、与謝野が審査の対象となった時点で委員からは離れ、哲学者で普通部主任や文学部長を務めていた川合貞一が加わった。また、正木は、富士見高原日光療養所に転じたため、昭和四年以降の会議には関与していない。結局、応募は八十通あったものの、一等、二等に相当する作は無いという結果に終わった。

次に、与謝野寛に作詞を依頼して、与謝野寛作詞、信時潔作曲の塾歌案が作られたが、昭和四年一月、これも不採用となった。与謝野は三月には新たな歌詞も提出するが、「塾歌二関スル協議会」では結局、「同氏トノ交渉ハ打切ル事」を決し、幸田露伴に依頼することにした。しかし、水上瀧太郎、久保田万太郎の協力も得て依頼を繰り返したものの承諾が得られず、十月、折口信夫に依頼し承諾を得るに至った。ただ、歌詞ができるまでには時間を要し、昭和九年になった。この間、昭和八年十一月に、塾長が林毅陸から塾歌に関する協議会の委員の一人であった小泉信三に替わり、それまで主導していた林が委員として引き続き協議に加わった。

同年十一月に予定していた福澤先生誕生百年並日吉開校記念祝賀会の機会には塾歌を発表したいと切望していることを伝え、ようやく七月に折口による歌詞が完成した。しかし、九月二十日の「塾歌に関する協議会」では次のようになった。

- 一 折口信夫君ノ歌稿ハ其儘そのままトシ置キ修正モ求メザルコトトシ不取敢謝礼ヲナスコトとりあえず
- 一 百年祭ニ対スル臨時処置トシテ塾長ヨリ富田正文君ニ百年祭祝歌作詞ヲ依頼シ置キタルコトヲ報告スルトコロアリタリ
- 一 塾歌作詞第一候補者ハ佐藤春夫氏トスルコト

なお、この日の協議会の発言メモを見ると、「これは少し困る」（高橋）、「全体として歌が弱い」（板倉）、「言葉が古い」「フレッシユでない」（川合）というように、折口の歌詞は概して不評であったようである。また、誰が作詞に適任かとの議論もなされ「富田君は案外よい」（塾長）、「公募しては如何」（高橋）、「候補の一人に佐藤春夫氏は如何」（塾長）というメモもあり、ここで富田正文の名前が小泉信三によって提案されたこともわかる。なお、「臨時処置」として富田によって作詞されたのが「日本の誇」であり、この時に使われた曲は、昭和二年に与謝野寛作詞、信時潔作曲で塾歌案として作られていた楽譜である。そして十一月二日、三田山上の大講堂で挙行された「福澤先生誕生一〇〇年並日吉開校記念祝賀会」では、この「日本の誇」が披露された。

一方、昭和十一年五月二十日、塾監局において「塾歌に関する協議会」が開催され、そこで、「評議ノ結果

歌詞ハ富田正文君ニ依頼スルコトニ決ス」となったのである。なお、この時の塾歌委員会委員は、川合貞一、板倉卓造、野口米次郎、高橋誠一郎、林毅陸となっていた。当日の会議には、川合、板倉の両委員と、塾長小泉信三、常任理事の横智雄と倉井忠、塾監局の主任小沢愛國とくが出席している。この経緯からも、塾歌の作詞者として富田が選ばれたのは、小泉信三の存在が大きかったことがわかる。

富田正文は、明治三十一年生まれで、大正九年、慶應義塾の文学部に入学し、在学中の十二年九月に福澤先生伝記編纂所が設けられるとその時から石河幹明の助手となった。以来、『福澤諭吉伝』全四卷（昭和七年）、『続福澤全集』全七卷（昭和八〜九年）の編集に従事した。戦後も、『福澤諭吉選集』全八卷（昭和二十六〜二十七年）、『福澤諭吉全集』全二十一卷（昭和三十三〜三十九年）、『福澤諭吉選集』全十四卷（昭和五十五〜五十六年）の編纂など、一貫して福澤諭吉の研究に携わった人である。また、『福澤諭吉伝』の刊行に伴い伝記編纂所が解散した時に、当時図書館長であった小泉の理解もあって図書館職員となって『続福澤全集』編纂の仕事を受け、それが終わったところで、義塾の職員となり、三田評論の編集担当、塾監局総務課長等も勤めていた。戦後は長く慶應通信（慶應義塾大学出版会の前身）の社長を務め、福澤諭吉協会の理事長も務めた。

小泉は、『福澤諭吉全集』の編纂をはじめ、常に富田を支援した人であったが、富田への信頼は早くから深いものがあつた。

小泉は富田の文章を高く評価していた。小泉のゼミの出身でやはり義塾の職員であった昆野和七は、小泉が昆野にしみじみと、「塾長をやめてから、つくづく思うことがある。在任中、私は色々なことをしたが、後のために誇り得ることのあることに気がついた。それは、富田君によって塾の公文書の中に数多くの名文を遺したことです⁽³⁾」と語ったことを紹介している。小泉が早い時期から名文家として評価していたことは、富田自身

が語った昭和十年のエピソードからも察せられる。

坪内逍遙が亡くなった時に、その逍遙の弔辞を書けといわれまして、三行ぐらいの弔辞をこしらえて先生に差し上げたんです。そうしたら先生を持って行って、向うでそれを読んで、その弔辞を置いてきたんですね。そうしたらあとで早稲田大学の五十嵐力という作文の先生がいて、これが本をこしらえて、短文中で非常に意を達している弔辞は小泉先生の弔辞だといってね（笑）、それを五十嵐の作文の教科書の中へ入れられたんです。それを先生のところへ送って来ました。「君こんなものができたよ」って、小泉先生が、「これ君の書いたもの、大変褒めてあるよ」って（笑）、大笑いしたことがありましたけど⁽⁴⁾。

富田の福澤研究への信頼は言うまでもないが、次のようなこともあった。昭和十二年、文部省が各大学に、「日本精神史」という科目を置くようにも求め、適当な教師がいない場合には文部省が世話をするとまで言うて来たことがある。その時に小泉は、福澤諭吉のを中心に「明治文化史」として開講することにした。表面的には求めに応じながらも、中身は文部省の求める教育内容とは正反対とも言えるものにしたのである。講師は富田にと考えたが、学内でも、教育歴のない富田が担当することに異論が出た。すると初年度の昭和十三年は、担当者を小泉自らが務め、アシスタントを富田とし、初回と最終回のみ小泉が講義して、他の回は全て富田が担当した。そして翌年からは完全に富田が担当することになった⁽⁴⁾。

小泉は、富田の文章、福澤研究だけでなく、その人格を高く尊重していた。たとえば、昆野和七は、小泉が自分にこう語ったこともあったと回想している。

「富田君は石河氏の唯一人の助手であり、福澤先生と義塾の歴史に実に詳しい。その学殖は得難いものではあるけれども、私が最も信頼しているは、その人柄が誠実透明で、その心事が鏡に写すが如くである」という一点です⁽³⁾と。

小泉の二女の小泉妙も、家庭での小泉の富田評を語っている。

父は晩年に、富田さんが塾長におなりになったらいいのだが、と言っていたことがありました。塾長とは別に財政面をみる塾長みたいな方がいればいいんだけど、と。福澤先生のことをもっと学生に伝えたいと思っただけのことと言ったのかもしれないね。とてもご信頼していました⁽⁵⁾。

ところで、富田に委嘱された作詞はどのようになったか。昭和十五年秋に歌詞が提出され、同年十一月十二日午前に開催された常任理事会、同日午後の「塾歌委員会」で採用が決定したのであった。なお、評議員会での批判的な指摘に対する小泉の対応も、紹介しておきたい。これも昆野の回想である。

塾歌の歌詞について、評議員の長老の一人からきびしい批判が出た。歌詞に歴史的の記述の多いのがどうか、またある字句に不適切と思われるところがある、書きかえてはどうかということであった。これに対して塾長は、断固として修正を拒否してこう答えている。

「この歌詞は塾中で名文家といわれている富田正文君の制作である、訂正の必要はない」と。

こうして原文は無修正のまま評議員会で承認されて、今の塾歌となっている。小泉塾長が富田氏を信頼することが如何に深かったかを物語る好例ではないだろうか。⁽³⁾

昆野の言う通り、今の塾歌の成立の過程は、富田が如何に小泉の深い信頼を得ていたかを示しているが、大正十五年から成立までこれほどの時間を要した塾歌は、小泉の富田への信頼によってようやく完成に至ったとも言うことができよう。

三 塾歌の歌詞の意図

(一) 富田正文による「塾歌に就て」

歌詞の意味は、新塾歌の制定・沿革と発表の様子を報じた三田評論昭和十六年二月号に綴じ込まれた歌詞の裏面に、「塾歌に就て」⁽⁶⁾と題して簡潔に説明されている。「此の塾歌は、慶應義塾の歴史の誇りと、我が学風と、塾の徽章の光輝とを謳ったものである」として、一番、二番、三番についてそれぞれ説明をしているので順に見てみたい。

その際、富田自身の説明に加えて、その説明に対応する文章を富田の様々な著述の中から見出すことでより理解を深めることができると思われる。そこで、特に同時期のものを中心に、対応する記述も照合してみた。富田は、それまでに記したものをまとめて、『福澤論吉棟效』⁽⁷⁾を昭和十七年に出版しているので、それを

中心に見ることとする。

富田が作詞を依頼されたのは、昭和十一年春であったが、実際に作詞をしたのは、いつのことであったか。富田は言う。「昭和十五年に当時あった望月志那研究基金からお金をもらって、学生を十人ばかり連れて、团长として朝鮮、中国、満州（中国東北地方）を回ったんですが、その途中で塾歌を考えながら行ったんですけれど、帰ってきて初めて歌詞を作って、小泉先生のところへ持っていった」といふ⁽⁷⁾。こうして出来たのが左記の塾歌である。そこで、以下では主に昭和十五年という年に注目することにする。

一、

見よ

風に鳴るわが旗を

新潮寄するあかつきの

嵐の中にはためきて

文化の護りたからかに

貫き樹てし誇りあり

樹てんかな この旗を

強く雄々しく樹てんかな

あ、わが義塾

慶應 慶應 慶應

二、

往け

涯なきこの道を

究めていよ、遠くとも

わが手に執れる炬火は

叡智の光あきらかに

ゆくて正しく照らすなり

往かんかな この道を

遠く遙けく往かんかな

あ、わが義塾

慶應 慶應 慶應

三、

起て

日はめぐる丘の上

春秋ふかめ揺ぎなき

学びの城を承け嗣ぎて

執る筆かざすわが額の

徽章の誉世に布かん

生きんかな この丘に

高く新たに生きんかな

あ、わが義塾

慶應 慶應 慶應

(二) 一番 —— 「見よ 風に鳴るわが旗を」と五月十五日

一番について、富田は次のように説明している。

我が国の近代文化の黎明とも云うべき明治維新に際し、一時國中変乱のため学事に心を寄する者きわめて少く、官私すくなの学塾地を払って閉鎖し、学者も多く跡を晦くまして所在の知れない有様であった其の時に、独り敢然として咿い唔ご講学こうがくの声を絶たず、我が国の学問の命脈を維持し、日本文明の旗じるしを護つたものは、実に我が慶應義塾あるのみであった。福澤先生が此の時、在塾僅かに十八名の青年学徒に向つて、此の塾の在らん限り日本の文運未だ地に墜ちず、諸君それ努めよと、鼓舞激励した事實は、我が国の学問教育の歴史の上に誇るべき話柄である。第一聯の歌詞は即ち其の意味を寓したものである。⁽⁶⁾

ここに記されているように、慶應四（一八六八）年五月十五日、芝新銭座の慶應義塾では、上野で繰り広げられていた彰義隊の戦の砲声を聞きながら、福澤がウェーランドの経済書を講じていた。一番はこの時のエピソードを歌っている。

塾歌の作詞と同時期に富田が書いた別の文章を見てみよう。維新の戦争、明治十年の西南の役、日清戦争の三つの戦争に対する福澤の態度を考察した「戦争と福澤先生」（昭和十五年七月岩波書店『福澤諭吉の人と思想』）である。その中で、富田はこのように記している。

思え、当時勤王佐幕の二大陣営が共に攘夷の旗幟を掲げて国内鼎の沸くが如き動乱の最中に在って、敢て西洋の学問講究を事として、時に身辺を脅かす暗殺の危険に対しても、遂に其の信ずるところを高唱して口を噤むことなく、平然として起居常時に異なることなきは、真に国家の運命を憂うる大勇の士に非ざれば能く為し得ざるところではないか。

此の気魄きはくがあり此の信念があつたればこそ「此の塾の在らん限り我国の文運いまだ地に墜ちず、吾等は日本の学問の命脈を維持する者にして慶應義塾は日本文明の旗じるしを護る者なり」と豪語して、塾中の少年子弟を激励し得たのである。⁽⁸⁾

傍線部分のように、「塾歌に就て」とほぼ同じ表現が見える。塾歌の歌詞の「見よ風になる我が旗を」の「旗」が、単に、青赤青の塾旗や日の丸の国旗を指すものではないことが良くわかる。富田が「日本文明の旗じるし」と要約した「旗」の意味は、福澤自身が、『福翁自伝』の中の「日本國中唯慶應義塾のみ」と見出しの付けられた箇所述べた次の一節が良く示している。

顧みて世間を見れば、徳川の学校は勿論潰れて仕舞い、その教師さえも行衛ゆくゑが分らぬ位、況して維新政府は学校どころの場合ではない、日本國中いやくしやく苟も書を読よんで居る処は唯慶應義塾ばかりと云う有様ありさまで、その時に私が塾の者に語たかたことがある。昔し々ナボレオン拿破翁の乱に和蘭國オランダの運命は断絶して、本國は申すに及ばず印度地方まで悉く取られて仕舞しまて、国旗を挙げる場所がなくなつた。所が、世界中わすか纔に一箇処を遣した。ソレは即ち日本長崎の出島である。出島は年来和蘭人の居留地で、欧州兵乱の影響も日本には及ばずし

て、出島の国旗は常に百尺竿頭かんとうに翻へん、して和蘭王国は曾かつて滅亡したることなしと、今でも和蘭人が誇かり居る。シテ見ると、この慶應義塾は日本の洋学の為めには和蘭の出島と同様、世の中に如何なる騒動があつても変乱があつても未だ曾て洋学の命脈を絶やしたことはないぞよ、慶應義塾は一日も休業したことはない、この塾のあらんかぎり大日本は世界の文明国である、世間に頓着とんじやくするなと申して、大勢の少年を励ましたことがあります。⁽⁹⁾

福澤は、この故事を大切に、慶應義塾の伝統を語る時に必ず強調している。その例も見てみたい。

最初に書かれたものは、「中元祝酒之記」である。この文章は、慶應義塾の独立宣言とも言うべき「慶應義塾之記」と一緒に『芝新錢座慶應義塾之記』に収められて印刷配布されたものである。この故事の直前の慶應四年四月に、福澤の洋学塾は築地鉄砲洲の中津藩邸を離れ、独自に土地建物を購入して芝新錢座に移転したが、「慶應義塾之記」とは、その際、時の年号をとって「慶應義塾」と命名すると共に、義塾の主義を明らかにしたものである。「中元祝酒之記」は、芝新錢座移転以来の江戸の動乱を超えて慶應四年の中元、七月十五日を無事に迎えたことを祝うもので、「日夜茲こゝに講究し起居常時に異なることなし。以て悠然世と相居あひまりて」⁽¹⁰⁾「社中自らこの塾を評して天下の一桃源と称し」⁽¹⁰⁾ていたこと等を誇らしく記している。

また、同じエピソードを「明治十二年一月廿五日慶應義塾新年発会之記」、「慶應義塾紀事」等でも言及している。「慶應義塾新年発会之記」は、西南戦争の影響によって経営難に陥っていた時期に社中を鼓舞した演説である。また、「慶應義塾紀事」は明治十六年に刊行されたもので義塾の二十五年史ともいふべきものである。このように、義塾の歩みの節目節目で社中の伝統を確認する際に、福澤はこの故事を誇らしく語ったが、晩年

まで終生変わらなかった。最晩年の「慶應義塾の目的」を語った演説も同様である。それは、明治二十九年十一月一日、義塾の鉄砲洲、新銭座時代の草創期の出身者を集めて行つた懐旧会の演説である。その末尾で、「慶應義塾は単に一所の学塾として自ら甘んずるを得ず。その目的は我日本国中に於ける気品の泉源、智徳の模範たらんことを期し……」と、今日「慶應義塾の目的」と呼ばれるものの原型が出て、「恰も遺言の如くにして諸君に囑託するものなり」で結ばれるものであるが、この演説の中で、以下のように語っている。

四面暗黒の世の中に独り文明の炬火を点じて方向を示し、百難を冒して唯前進するのみ。兵馬騷擾の後に、旧幕府の洋学校は無論、他の私塾家塾も疾く既に廢して跡を留めず、新政府の学事も容易に興るべきに非ず、苟も洋学と云えば日本国中唯一処の慶應義塾、即ち東京の新銭座塾あるのみ。世人は之を目して孤立と云うも、我は自負して独立と称し、在昔欧洲にてナポレオンの大変乱に荷蘭国の滅亡したるとき、日本長崎の出島には尚おその国旗を翻して一日も地に下したることなきゆえ、荷蘭は日本の庇蔭に依り、建国以来曾て国脈を断絶したることなしとて、今に至るまで蘭人の記憶に存すとの談あり。同志の士は是等の故事を物語りして、我慶應義塾は荷蘭の国旗を翻したる出島に異ならず、日本の学脈を維持するものなりと

福澤は、日本の蘭学、洋学を受け継ぎ発展させて来た先人への感謝と報恩の念が強く、それを更に進めて次の時代に引き継ぐのだという気概が強かった。例えば、「旧幕府の末年」に「蘭学事始」を読んだ時のことを、「我々は之を読む毎に先人の苦心を察し、その剛勇に驚き、その誠意精心に感じ、感極りて泣かざるはなし」⁽¹²⁾

であったと「蘭学事始再版之序」で回想している。また、上野彰義隊の戦いの前月に書かれた前述の「慶應義塾之記」でも、蘭学者の系譜を丁寧^{ていねい}に記しながら「この人々孰^{いず}れも英邁^{えいまい}卓絶^{たつせつ}の士なれば、只管^{ひたすら}自我作古^{じがさく}の業^{わざ}にのみ心を委ね、日夜研精し浸食を忘るゝに至れり」と「我^{われ}自^より古^{いにしへ}を作^なす」の気概^{きがい}に触れ、「吾党^{わがとう}今日の盛際に遇^あうも古人の賜に非ざるを得んや」と述べた。⁽¹³⁾そして、「後^あ来^あの吾曹^{わがら}を視ること猶^{なほ}吾曹^{わがら}の先哲^{せんてつ}を慕^あうが如きを^あ得^あば、豈^{あにまた}亦^{また}一大快事^{いちだくがいじ}ならずや。嗚呼^{ああ}吾党^{わがとう}の士、協同^{きょうどう}勉勵^{めんれい}してその功^{こう}を奏^{そう}せよ」、つまり、後進^{こうしん}の人達が、丁度^{ていど}自分^{自分}達が先進^{せんしん}の洋学者^{やんがくしや}達^{たち}を慕^あうように見てくれるようになったらこんな愉快^{ういきがい}なことではないか、と励^あましている。

それだけに、オランダ人がナポレオンの戦乱^{せんらん}の時代にも国脈^{こくみやく}が途絶^{とつせつ}えることがなかったと長崎出島^{ながさきいじま}にオランダ国旗^{おランダこくり}が翻^{ひら}り続^{つづ}けたことを誇^{たか}りにしているが、自分^{自分}達はまさにそのオランダ国旗^{おランダこくり}の翻^{ひら}る長崎出島^{ながさきいじま}のような存在^{そんざい}であると、繰^{くり}り返^{かへ}し述^のべるほどに、日本の学問^{がくもん}、文明^{ぶんめい}の命脈^{めいみやく}を、混乱^{こんらん}の時にも途絶^{とつせつ}えさせなかったことの自負^{じぷ}は大きかったのである。

(三) 二番——「往^いけ涯^えなきこの道^{みち}を」と小幡^{こはた}甚^し三郎^{ざぶろう}

二番^{にばん}について富田^{とみだ}は次のように説明^{せつめい}している。

福澤^{ふくざ}先生^{せんせい}に「愈^い究^{きう}而愈^い遠^{えん}」という語^ごがある。学問^{がくもん}の途^とは究^{きう}めれば究^{きう}めるほど愈^い々^ず遠^{えん}く愈^い々^ず遙^{えん}かなるものである。然^{しか}しながら慶應^{けいおう}義塾^{ぎじく}の学問^{がくもん}は、其^{その}の最後^{さいご}の目標^{もくひょう}を我が国権^{こくけん}の皇張^{すうちやう}の一点^{いってん}に据^たえて曾^{かつ}て動^{どう}変^{へん}したることなく、建塾^{けんじく}以来^{いらい}社中^{しゃちゆう}の固^{かた}く執^{しつ}つて揺^ゆがざる報国^{ほうこく}致死^{ちじ}の研学^{けんがく}精神^{しんしん}は、我等^{われら}の踏^ふみ拓^{たく}く学芸^{がくげい}の曠野^{くわうや}に一路^{いちろ}

炳乎たる方向を指し示すものである。第二聯は即ち此の意味である。⁽⁶⁾

詳しくは後で解き明かすが、「皇張」「報国致死」などの言葉の意味は、この文章の書かれた時代から来る先入観で誤解しないように注意する必要がある。「皇張」という言葉について、文字から受ける印象から、天皇を中心とした軍国的な拡張を示す言葉であるかのように誤解する者があるが、元々、そのような意味を持つ言葉ではない。例えば、各時代の豊富な用例を蒐集した上で編纂していることで有名な『日本国語大辞典』（小学館）には「大いに主張すること」とその意味が記されている。また、「報国致死」も、後述するように、自らの独立、一国の独立のために、その誇りを喪うようなことはしないという気概、覚悟のことである。

「愈究而愈遠」は、福澤が揮毫を求められるとしばしば書いた語である。その意味は、その説明にもあるように「学問の途は究めれば究めるほど愈々遠」というものではあるが、まさに「然しながら」と記されたように、それに留まるものではない。

福澤は『文明論之概略』において、「抑も文明は相對したる語にて、その至る所に限あることなし」とし、⁽¹⁴⁾「人間の目的は唯文明に達するの一事あるのみ。之に達せんとするには様々の方便なかるべからず。随て之を試み随て之を改め、千百の試験を経てその際に多少の進歩を為すべきものなれば、人の思想は一方に為すべからず。(略) 仮令試てよく進むも未だその極度に達したるものあるを聞かず」と述べた。⁽¹⁵⁾そして、「人の精神の發達するは限あることなし、造化の仕掛には定則あらざるはなし。無限の精神を以て有定の理を窮め、遂には有形無形の別なく、天地間の事物を悉皆人の精神の内に包羅して洩すものなきに至るべし」と、⁽¹⁶⁾人間の智に無限の期待を寄せた。これは正に「愈究而愈遠」である。しかし同時に、当面の現実世界を見れば、「今の世界

の有様に於て⁽¹⁷⁾」は「国の独立は目的なり、国民の文明はこの目的に達するの術なり⁽¹⁸⁾」ということでもあった。当時の日本の置かれた状況を考えると、福澤の危機感⁽¹⁹⁾は切実なものであったに違いない。

この点について、富田の「福澤先生の生涯」（昭和十六年十二月日本評論社刊『学問のすゝめ』所収）には、歌詞の説明と重なる表現がある。すなわち、「彼の上野の彰義隊の戦の砲声を耳にしつつ新舶来の経済書を講じていた事実や、内乱の災いを免がれんがために外人の庇護を蒙ることを屑⁽²⁰⁾とせずして断乎として報国致死の研学精神を發揮した事実は余りにも有名な挿話である⁽¹⁹⁾」とあり、前掲の「戦争と福澤先生」にも、「報国致死、国家の独立を身を以て護らんとする精神こそ、正に福澤先生の戦乱中に於ける洋学講究の心事であつて、（略）まことに、福澤先生を始めとして其門下に踏止まった少年致死の学徒は、当時心ある者の真に憂えざるを得なかつた日本の国権確立のために、身を以て時代の嵐の中に起ち上つた文明の十字軍と称しても差支えないのである⁽²⁰⁾」とある。いずれも、そこで述べているのは、維新の動乱の時の小幡甚三郎の故事であり、このことから、富田は二番の歌詞を書くときに小幡甚三郎の故事を意識していたことがうかがえる。

小幡甚三郎（元は仁三郎と記した）は、福澤先生が元治元（一八六四）年、郷里中津に帰省した折りに、将来の塾の柱となることを期待して見出し連れてきた六人の門弟の一人で、後に先生のおき女房役となつた篤次郎の弟である。甚三郎は、草創期の義塾にあつて、実務に優れ、芝新銭座から三田への移転などで大きな働きをしただけでなく、それまで乱雑無規律な書生風だつた塾内の風儀を改めることにも大いに貢献した人であつた。その才能が期待されて明治四年、旧中津藩主奥平昌邁の留学に随行する形で渡米留学した。ニューヨークのブルックリンの Polytechnic Institute で学ぶが、明治六年一月二十九日、フィラデルフィアの病院で亡くなつてしまふ。帰国後の活躍を楽しみにしていた福澤の悲嘆は大きく、福澤の良き理解者であつた中津の島津

祐太郎にあてた手紙には、帰国したら、あれもしようこれもしようと思しみにしていたのに「心中の百事一時に瓦解」して何も手につかない、一日中愚痴ばかりこぼしていると書き記している。⁽²¹⁾

この甚三郎の故事とはどのようなものであったか。福澤の明治十五年三月七日付時事新報「故社員の一言今尚精神」によって見てみたい。

戊辰戦争のさなか、官軍が西から攻めてきて、明日にも江戸市中が戦乱に巻き込まれようという時、江戸の市民は、一身の安全を図ろうと大慌てになっていた。洋学者の中には、西軍も外国人と事を構えることは好まないに違いないと、横浜の居留地に逃げる者、仮に西洋の籍に入る者もあった。また、つてのある者は、外国公館の使用人であるという証明書を貰って、護身に役立てようとする者もあった。塾にも、親切心で、アメリカ公館の雇い人の証明を手配してくれると申し出る人がいた。その時のことである。

時に本塾の教員小幡仁三郎 この事を聞き、走て塾の広間に出て、顔色を変じ目を瞋らして同窓の諸友に告て曰く、諸君は今日の形勢を見て如何の觀を為すや、東軍西軍相戦うならんと雖ども、畢竟日本国内の戦争にして唯是れ内乱なるぞ、我輩は文を事としてその戦争に関するなしと雖ども、内外の分は未だ之を忘れず、西軍或は暴ならん、東軍或は無法ならん、来て我輩に害を加えんとする者あらば、我亦男兒なり、よく之を防がん、之を防て力足らざるときは唯一死あるのみ、堂々たる日本人にして報国の大義を忘れ、外人の庇護の下に苟も免かれんより、寧ろ同国人の刃に死せんのみ、我輩が共にこの義塾を創立して共に苦学するその目的は何処に在るや、日本人にして外国の書を読み、一身の独立を謀てその趣旨を一國に及ぼし、以て我國権を皇張するの一点に在るのみ、然るを今にしてこの大義を顧みざるが如きは初

より目的を誤るものと云うべし、我義塾の命脈を絶つものと云うべし、彼の印鑑の如きは速に之を火に投じて可なりとて、その語氣凛々、決する所あるが如し。聞者悚然として復た一言を発せず。之より社中の氣風益固結して曾て動変することなく、爾後王政維新の太平に逢い又無数の事変をも目撃したれども、報国致死は我社中の精神にして、今日我輩が専ら国権の議論を主唱するも、その由来一朝一夕に非ず、蓋し社中全体の氣風なりとは雖ども、仁三郎君の一言亦重しと云うべし。⁽²²⁾

なお、福澤は、この故事を重んじており、自身の著作をまとめた『福澤全集』を刊行するに当たり、その「緒言」においても、詳しく紹介して「当時、当時小幡仁三郎氏の一言は文明独立士人の龜鑑なりとて永く塾中に伝えて之を忘る、者なし」と述べている。⁽²³⁾

富田の歌詞の説明にある、「慶應義塾の学問は、其の最後の目標を我が国権の皇張の一点に据えて曾て動変したることなく」は、この「故社員の一言今尚精神」の記事の中にある「義塾を創立して共に苦学するその目的は何処に在るや、日本人にして外国の書を読み、一身の独立を謀てその趣旨を一国に及ぼし、以て我国権を皇張するの一点に在るのみ」「之より社中の氣風益固結して曾て動変することなく」に由来するものであり、「建塾以来社中の固く執つて揺がざる報国致死の研学精神」は、「報国致死は我社中の精神にして」から来ていることが良くわかるであろう。そしてまた、「国権」とは日本の独立を意味し、「報国致死」とはたとえ命にかかわるとしても独立の誇りを喪うような振る舞いをしない覚悟を言うのだということも了解される筈である。

富田は、「福澤先生の生涯」において、なぜ福澤がこの故事に深い思いを抱くのかを理解するために、この小幡甚三郎の故事の直ぐ後で、「左に自伝に記された一節を引いて、当時の先生の心境を窺おう」と述べ、⁽²⁴⁾

『翁自伝』の「子供の行末を思う」の見出しのついた部分の一節と、「米国前の國務卿又日本を評す」の中の一節を引用している。すなわち、

その時の私の心事は実に淋しい有様で、人に話したことはないが今打明けて懺悔しましょう。維新前後、無茶苦茶の形勢を見て、逆もこの有様では国の独立は六かしい。他年一日外国人から如何なる侮辱を被るかも知れぬ、左ればとて今日全国中の東西南北何れを見ても共に語るべき人はない、

の部分と、

左りとて自分は日本人なり、無為にしては居られず、政治は兎も角も之を成行に任せて、自分は自分で聊か身に覚えたる洋学を後進生に教え、又根気のあらんかぎり著書翻訳の事を勉めて、万が一にも斯民を文明に導くの僥倖もあらんかと、便り少なくも独り身構えした事である。

の部分である。外国人からは、日本最頂の米国前國務卿にさえも「こんな根性の人民では気の毒ながら自立は難しいと」見られる有様なのに、一方新政府の役人は「古学の固陋主義より割出して空威張りするのみ」で「真実落胆した」という心境を吐露した上での続きに出てくる一節である。

このような状況の中で小幡の故事であることを考えると、福澤の言わんとするところは、『学問のすゝめ』の、「一身独立して一国独立する」、「独立の気力なき者は、国を思うこと深切ならず」の「独立の気力」に通

じるものでもあるということがわかる。

更に、歌詞の「わが手に執れる炬火かがりびは 叡智の光あきらかに ゆくて正しく照らすなり」が、前述の「慶應義塾の目的」の引用部分の冒頭の「四面暗黒の世の中に独り文明の炬火きよかを点じて方向を示し、百難を冒して唯前進するのみ」に対応するものであることから、仮令たと真つ暗闇の時代であろうとも、独立の確立と文明の進歩を目指して歩み続けようという歌詞にこめられた意味が明らかになるであろう。

(四) 三番——「徽章の誉世に布かん」と小泉信三「塾の徽章」

三番の歌詞については、富田は次のように解説している。

此の伝統と此の精神とを相承け相嗣ぐこと幾春秋、揺ぎなき基礎を確立した此の学問の牙城を護る我等の胸は限りなき矜持に満つるものであるが、此の誇りを持つ者には、又それに相応しき責務を伴わねばならぬ。伝え聞く、古のもの、ふは兜の前立の誇を護るに、常住坐臥の鍛錬修養を積んだという。今この丘の上に若き日の力の限り生きんとする我等も亦この心掛を以て日常の嗜となし、塾の徽章の輝くところ常に世の信頼と尊敬の的たらんことを期するものである。第三聯の歌詞の中「執る筆かざす我が額の徽章の誉」とは我等の兜の前立なる本の徽章の光輝の謂である。⁽⁶⁾

福澤は、既に述べたように、洋学の系譜の上に自らを位置づけ、それを絶やさず、更に歩みを進める使命感を強く抱いていた。義塾は、時代が明治に入ってから、時代の変化の中で様々な困難を乗り越えて来た。例

えば、明治十年前後から十三年頃にかけて、学生数が激減して存続が危ぶまれる厳しい状況に直面した。また、明治十四年の政変では、大隈重信と共に義塾の出身者達が、政府から排斥された。明治十年前後から十三年頃にかけての経営の危機については、富田正文は『慶應義塾七十五年史』で次のように記している。

右の如く先生始め義塾社中の者は、三田移転以来非常なる会計の困難を凌ぎつつ、同心協力よく義塾を維持して其学事を発展せしめ、義塾の学風を以て全国の教育界を風靡したのであるが、一方に於て社中の先進後輩は封建的遺風の破壊、文明的新日本の建設を目標として、其学び得た西洋文化の学問を社会の実地に施し、あらゆる方面の指導者として活躍し、其影響力は真に凄じき勢を示したのであって、新日本の文明は半ば三田の山上より生まれたと称するも過言ではないのである。⁽²⁷⁾

このように、危機に見舞われてもその都度困難を乗り切り、学塾としての基礎を確かにしてきた訳である。このような歴史を受け継ぐ者にはその責務がある。昭和十四年暮れに塾長小泉信三は、塾生の容儀礼節を高めることの必要を強く感じ、「塾の徽章」と題する講話を行い、率先してその励行を導いた。そして、翌十五年の十月には、塾生の居常心得を四箇条にまとめたものを各教室に掲げるとともに、各条に註解を付した小紙片を塾生に配布した。「心志を剛強にし容儀を端正にせよ」「善を行うに勇なれ」等の言葉で知られる「塾長訓示」である。「塾の徽章」の講演は、翌年三田評論にも掲載されたが、次の一節を見出すことができる。

塾の徽章と制服との光輝を護るために諸君は居常必ず相当の覚悟を持つていると思う。(略)もし万一に

もこの徽章に対して敬意を失するものがあつたなら、諸君としては必ずその者にその非を悔いて改めさせるだけの処置をとる用意があるであろう。(略) 実はそれより先きに、諸君としては諸君の徽章と制服とをして人々の最高の畏敬と信頼との的とならしめるに遺憾なきことを期せねばならぬ。⁽²⁸⁾

と述べて、日々の心がけについて語りかけた。富田の説明とは、趣旨だけでなく傍線部分のように表現も重なる部分があり、富田は、この演説も意識していたと思われる。

四 塾歌の作られた時代

歌詞の意味への理解を深める為には、これが作られた昭和十五年がどのような時代であつたかも考える必要がある。

既に、慶應義塾は、軍部やその周辺から、西洋文明を導入した福澤諭吉の学校、自由主義の学校として、様々な言いがかりをつけられるようになっていた。また、陸軍の予備士官学校で昭和十二年から使われていた教科書『本邦史教程』は、福澤を非難するものであつた。そして、昭和十五年頃から、どこからともなく反福澤、そして慶應義塾のリベラルな教育に対する批判の風潮が生じてきたという。義塾の職員で当時三田評論等を担当していた昆野和七は以下のように述べている。

「先ず端的に当時の背景を言うと、昭和十五年の晩秋から翌十六年の春にかけて、即ち対米英戦争の勃発直

前のことであるが、軍部（主として陸軍）の政治的支配が強くなり、「国家総力戦態勢の確立」とか、「国民精神総動員」「職分奉公」などという標語がやかましくなったところ、どこからともなく、福澤攻撃論、福澤思想の抹殺論が、強力に流布された。新聞、雑誌上ではないか、流言は流言を呼んで、慶應義塾出身者にとっては、どうにも気になることで、大袈裟な表現だといまの人には思われるかも知れないが、日常の生活にも差し響きを感じずという情勢であつた。⁽²⁹⁾

そして実際に、富田と宮崎友愛とで編集し、大学予科の副読本として使われた『福澤文選』は、文部省の思想局からその中に収録されている「帝室論」の削除が求められ、同じ頁数の他のものに置き換えることを余儀なくされた。また、富田がそれまでに書いたものをまとめた『福澤論吉襍攷』が昭和十七年二月に刊行されると、「国賊の本を出すとは何ごとだ」と三田文学出版部に満州の部隊の将校から文句の手紙が来ることもあつた⁽³⁰⁾という。

また、図書館においては、そのスタンドグラスは、封建主義の時代から新しい文明の社会を築こうとする義塾の思想を示すもので、ペンを手にした女神を、鎧武者が白馬を降りて迎えている意匠であるが、これについても、既に様々な言いがかりをつけられるようになっていた。当時の厳しい状況を図書館員であつた伊藤弥之助が『慶應義塾図書館史』に記している。

「その頃——十五年——が最も厳しい図書行政の年となつた⁽³¹⁾。七月十二日にはマルクス・エンゲルス関係図書の閲覧禁止令が出る。更に、警察署員が来て禁書のリストに載っている書籍については供出するように命じられることもあつた。しかし、義塾の図書館では、「高橋（誠一郎）監督の頑張り」と抵抗とが功を奏して、辛

くも供出を招かれ」とたいう。更に、これらの「危険図書」の目録カードは抽出除外しながらも、図書自体は旧来のままに収蔵していたので、教職員は書庫内で閲覧することが出来た。また、思想問題の故に職を追われた他大学の教授にも、一般公開を続けて利用に供したのも義塾の図書館であった。「そのことが昭和十七年頃には警察の知るところとなり、私服の刑事が図書館玄関脇の神代杉の蔭にたたくむ風景も見られた」という。

このように次第に戦時色が大学にも及ぶ中で、義塾は、特に強い攻撃の対象となっていたにも関わらず、その主義を護ることに努めたのであった。そのことを経済学部教授であった平井新は小泉信三が没した時に「今次、戦争中福澤諭吉を国賊と罵り、はては慶應義塾を押し潰さんばかりの軍部の圧力に、よく抗し、よく耐えて、よく「法城」を守りぬかれたその消息はあまり人に知られてはいないが、その「知られざる功績」は慶應義塾と共に永く生きることであろう」と記している⁽³²⁾。

富田正文もこのような状況を良く知る立場にあった。例えば、文部省の思想局が加田哲二、武村忠雄の二教授と高等部の教員船江豊三郎の処分を求めて来た時には、庶務主任として富田は、文部省との折衝を担っている。その時小泉は最後まで文部省の要求を頑なに聴かなかつたが、その小泉の様子を富田は後に「先生実にそういう時には強硬ですよ。『文部省の役人なんぞに、なんのканの言われてたまるもんじゃない』てなことをよく言いました⁽⁴⁾」と後に回想している。また、昭和二十五年に小学校教員向けの『新しい小学校』に小泉の推薦で寄稿した「人間の教師 福澤諭吉」の末尾の一節は、やはり戦時中の社会の空気を富田がどのように認識していたかが良くわかるものである。

我が国民に人權の尊嚴を教え、自由の理を説き、独立の大義を示し、民主主義の大道を打開してくれたこ

の巨人を、小賢しげなしたり顔で、非謗し罵言し攻撃する者が横行しまたその尻馬に乗る者が輩出していた間に日本の運命は急坂に石が転ずるような勢で顛落して行った。そして、やっと気がついて、改めてその真価を見直そうとしたときには、福澤を始めとして幾多の先人が嘗々たる辛苦を以て築き上げた日本は既にもとの振り出しに戻ってしまっていたのである。⁽³³⁾

このような慶應義塾と福澤諭吉をとりまく時代の空気を知り、前章で見たように塾歌の歌詞に込められた意味を知る時、塾歌は、抵抗の精神に溢れた歌であるようにも思われる。しかし、富田は、時流に迎合することなく、また時流に反応することなく作詞している。まさに「遠く遙けく往かんかな」であり、時流からも悠然とすることで独立自尊の矜持を示し、却って塾歌とその意味を矮小化しないものとなったと言えよう。

なお、このことをより確かにしたのもとして次の二点を指摘しておく必要がある。第一に、作詞に当たって意識した二つの故事が、富田にとつて、困難な時代にあつてより強く意識したことはあつたかもしれないが、その前後の比較的穏やかな時代にあつても一貫して大切にし続けたものであつたことである。第二に、将来永く歌い継がれることを意識して作詞に取り組んでいたことである。

第一の点については、例えば、大学予科の副読本とされた昭和十二年刊の『福澤文選』でも、「第二章 慶應義塾」に、「慶應義塾之記」と共に「気品の泉源智徳の模範」と「故社員の一言行尚精神」を収めている。

戦後も同様で、三田評論でも、昭和二十七年に義塾の名誉博士を受けたワックスマン博士が、帰国後ラトガース大学傍の墓所に眠る甚三郎に関する資料を調べてまとめた「小幡甚三郎のことそのほか」が掲載されると、その翌号で「小幡甚三郎の死―ワックスマン博士の寄書について―」を記し、甚三郎の故事を詳しく紹介

している。⁽³⁴⁾ 昭和三十八年、「慶應義塾出身者人物列伝」の連載がはじまるにあたり、「その一」に選んだのも小幡甚三郎であった。⁽³⁵⁾ また、ポプラ社「世界名言集」のシリーズの一冊として昭和四十二年に出版された『福澤諭吉名言集』では、子供向けの読み物ではあるが、著者富田は、「独立自尊」の章と「学問のすすめ」の章の最初に、「故社員の一言今尚精神」の一節と、『福翁自伝』「慶應義塾のあらんかぎり、大日本は世界の文明国である」をそれぞれ取り上げ、二つの故事を詳しくわかりやすく解説しているのである。また、最晩年の大著である『考証福澤諭吉』でも、その「二十八 後期新銭座時代」の見出しに、まさに「報告致死の研学精神」と「慶應義塾とオランダ国旗」が並んでいる。

永く歌い継がれることを意識して歌詞を考えたことは、『三田評論』の「富田先生に聞く」で富田自らが語ったことである。聞き手の西川俊作の「塾歌のなかには、福澤諭吉という名前は一つも出てきませんね」との質問に、「私は塾歌では福澤先生という名前は全然使わなかった。第一あのなかに漢語の熟語というのは「文化の護りたからかに」と「叡知の光あきらかに」の、「文化」と「叡智」という二カ所だけしかないんです。あとは漢語の熟語は全然使わなかった。「独立」とか「自尊」とかいう意味の言葉も、なるべく入れないようにはしたんです」と答えている。更に、「先々いつて塾の将来に、永い間使われるのに、いつまでも福澤先生でもないだろうと思って、使わないことにしたんです」と加えた。⁽⁷⁾

この富田の意図は、福澤諭吉を遠ざけるということではない。「独立自尊」などの言葉がただお題目のように唱えられて独り歩きするのではなく、そこにあった情景と気概を大切に伝えたいということでもあった。

昭和二年、三田新聞に掲載された「福澤先生の研究」がその真意を良く示している。これは富田が編纂中の『福澤諭吉伝』について書くことを依頼されて記したものであるが、自身がこの仕事に関わるまでは、既に三

年も在学していたにもかかわらず「福澤先生に就て殆ど無知識であったと白状する」として、「先輩が何斯につけて福澤先生を引合いに出す態度を、余り快く受入れることが出来なかった」こと、「その割には先生其人の研究は等閑に附せられていた」ことを指摘している。そして、次のように書いた。

この先生に就て殆ど無知識に近い僕等後輩にとっては、三十年来依然たる「独立自尊」の標語を年々歳々反復されるより、もっと具体的に僕等の生活に密接な方面で先生が如何に偉大なる先覚者であったかを、詳かにして頂いた方が、遙かにフレッシュな感激を覚えるのである。⁽³⁶⁾

富田は、この体験を何度か述懐している。⁽³⁷⁾ 富田は「学資を自分で稼がねばならない苦学生」で、勤めていた雑誌社が関東大震災で解散した時、未だ教室は罹災者で一杯で授業どころではない三田山上をぶらぶら歩いていたところを、その二ヶ月後に塾長になる理事の林毅陸が偶々通りかかり、立ち話をする中で、事情を知った林に伝記編纂所を勧められたのが福澤研究に携わるきっかけであった。そして、編集主任の石河幹明から『福翁自伝』を渡され「これを何遍でも繰返して読め、どこになが書いてあるかを諳んじるまで読め」と言われた。富田は、「それでそれを読んで何回も読み返した。それですっかり福澤先生という人に傾倒しちゃったんです」⁽³⁸⁾という。その富田の実感の表れでもあった。

五 おわりに

富田正文による塾歌が生まれた背景には、塾歌ともなれば著名な歌人の作でも満足できる歌詞でなければ採用しないという姿勢があった。新塾歌を作ることにしてから制定されるまでには十四年を要したが、その間には、与謝野寛や折口信夫のような著名な歌人にも委嘱されたにもかかわらず、いずれも採用されることはなかった。そして、その途中で塾長の任に就いた小泉信三の文章家としての、また福澤研究者としての深い信頼があつて、富田正文に委嘱されるに至つたのである。

富田の歌詞には、直接的には「福澤先生」等の字句や「独立自尊」のような義塾のモットーとでも言うべき言葉は入っていない。しかし、富田は福澤諭吉と慶應義塾の気概を表す重要な故事を強く意識していた。そして、作詞されたのが、昭和十五年という軍事色が強まり、福澤や義塾が国賊として言いがかりを付けられるようになった時代であることを考えると、時流に迎合することなく、超然としている詩調とそこにこめられた故事を持つ意味は極めて大きいものがある。

富田正文は、生涯の福澤研究の成果をまとめた『考証福澤諭吉』上下二巻を刊行した翌年の平成五年、九十五歳で没した。富田が長年理事長を務めた福澤諭吉協会の『福澤手帖』の追悼特集号では、義塾の名誉教授であり、富田とも近しかった小池基之は、塾歌の思い出を語って、こう記した。

その作詞の背後には、勿論、富田先生の精緻な福澤諭吉研究の蓄積のあつたことを蔑ろにすることはでき

ない。富田先生は大正一二年から十年間、石河幹明氏の助手として『福澤諭吉伝』全四巻の編纂に従事し、昭和六年以来『続福澤全集』の編纂、また昭和七年には『慶應義塾七十五年史』の編纂にも当たっている。新塾歌はこのような土壌のうえに、自ずと開いた一輪の花であったのであろう。⁽³⁹⁾

これは富田を良く知る人の誰もが感ずることであつた。また、この追悼号では、塾史の研究者であり、『考証福澤諭吉』の出版に当たり富田を助けた佐志傳が、小泉が富田の労に感謝して父小泉信吉宛ての福澤諭吉の書簡を立派に表装して贈つた際の跋文を紹介した。なおこれは、富田自らが編集した『小泉信三全集』にも未収録のもので、佐志は「これは態と載せられなかつたと言ふべきであらう。富田先生の奥ゆかしさがにじみ出ている」と添えている。富田に作詞が委嘱される前年のものであるが、塾歌の歌詞にこめられた意味を理解してこれを読む時、小泉が述べる「君が文章平明の文字の裡に痛烈なる気概の人に迫るものあるを感ず」富田の文章の特質が塾歌には良く表れていると思われる。その意味では、塾歌は、富田の文章の特質を早くに的確に捉え、高く評価していた小泉信三とそれに応えた富田正文の両者が揃つてはじめて生まれたとも言ふことができるであらう。

此手簡は福澤先生が予の先考小泉信吉に与へ給ひしもの、一なり。今特に之を先生手簡集の表装より剥ぎて富田正文君に贈る

富田君は曩に石河幹明氏が福澤諭吉伝を撰述するを輔け、後に慶應義塾々監局に入り兼ねて義塾の文章を掌る。君が文章平明の文字の裡に痛烈なる気概の人に迫るものあるを感ずのは、蓋し福澤先生以来吾党

文章家の最も尚ぶ所を得たるものと謂ふへし。君が吾塾の爲めに作るところの文、今大小百余編に上る。皆な同人の三誦して描かざる所なり。

茲に些か君が文事の功勞を稿ふの意を表せんと欲して此手簡を贈り、併せて一言其由来を記すこと斯の如し。

昭和十年歳晚

小泉信三⁽⁴⁰⁾

引用文献

- (1) 「新塾歌の制定―塾歌の制定とその沿革―」『三田評論』五二二号、昭和十六年二月、三〇―三二頁
- (2) 坂部由紀子「信時潔作品の二つの「慶應義塾塾歌」―二人の作曲依頼者 与謝野寛・小泉信三―」『近代日本研究』三三卷、平成二十九年二月
- (3) 昆野和七「『三田評論』の頃のこと」『福澤手帖』七九号、平成五年、一六一―一七頁
- (4) 富田正文（聴く人 小泉準蔵・タエ、桑原三郎）「小泉信三先生のこと（下）」『福澤手帖』六五号、平成二年六月、一五―二七頁
- (5) 小泉妙『父小泉信三を語る』（山内慶太、神吉創二、都倉武之編、慶應義塾大学出版会、平成二十年）、一六八頁
- (6) 「塾歌に就て」『三田評論』昭和十六年二月
- (7) 富田正文（聞き手西川俊作）「富田先生にきく」『三田評論』八九七号、昭和六十三年十一月、五〇―五五頁
- (8) 富田正文「戦争と福澤先生」『福澤論吉襍攷』（昭和十七年二月、三田文学出版部）、二四頁
- (9) 福澤諭吉『福翁自伝』『福澤諭吉著作集第十二卷』（松崎欣一編、慶應義塾大学出版会、平成十五年）、二五四―二

五五頁

- (10) 福澤諭吉「中元祝酒之記」『福澤諭吉著作集第五卷』(西川俊作・山内慶太編、慶應義塾大学出版会、平成十四年)、
一一―一二頁

- (11) 福澤諭吉「気品の泉源、智徳の模範」『福澤諭吉著作集第五卷』(前掲)、一三九―一四〇頁
- (12) 福澤諭吉「蘭学事始再版之序」『福澤諭吉著作集第五卷』(前掲)、二六六頁
- (13) 福澤諭吉「慶應義塾之記」『福澤諭吉著作集第五卷』(前掲)、四一―八頁
- (14) 福澤諭吉「文明論之概略」『福澤諭吉著作集第六卷』(戸沢行夫編、慶應義塾大学出版会、平成十四年)、五七頁
- (15) 福澤諭吉「文明論之概略」『福澤諭吉著作集第六卷』(前掲)、七五頁
- (16) 福澤諭吉「文明論之概略」『福澤諭吉著作集第六卷』(前掲)、一八二頁
- (17) 福澤諭吉「文明論之概略」『福澤諭吉著作集第六卷』(前掲)、三三一―三三二頁
- (18) 福澤諭吉「文明論之概略」『福澤諭吉著作集第六卷』(前掲)、三三三―三三〇頁
- (19) 富田正文「福澤先生の生涯」『福澤諭吉襍攷』(前掲)、一三三頁
- (20) 富田正文「戦争と福澤先生」『福澤諭吉襍攷』(前掲)、二五頁
- (21) 山内慶太「アメリカに眠る義塾の「亀鑑」——小幡甚三郎と馬場辰猪の墓所」『三田評論』一一一五号、平成二十年
八・九月、三八―四一頁
- (22) 福澤諭吉「故社員の一言今尚精神」『福澤諭吉著作集第五卷』(前掲)、一七八―一七九頁
- (23) 福澤諭吉「福澤全集緒言」『福澤諭吉著作集第十二卷』(前掲)、四四二頁
- (24) 富田正文「福澤先生の生涯」『福澤諭吉襍攷』(前掲)、一三三頁
- (25) 福澤諭吉「福翁自伝」『福澤諭吉著作集第十二卷』(前掲)、二五二―二五三頁
- (26) 福澤諭吉「福翁自伝」『福澤諭吉著作集第十二卷』(前掲)、二五〇頁

- (27) 『慶應義塾七十五年史』（慶應義塾、昭和七年五月）、一四〇頁
- (28) 小泉信三「塾の徽章―塾生への講話」『小泉信三エッセイ選1 善を行うに勇なれ』（山内慶太・神吉創二・都倉武之・松永浩気編、慶應義塾大学出版会、平成二十八年十月）、二二二頁
- (29) 昆野和七「解説（小泉信三「徳富蘇峰氏の福澤先生評論に就いて）」『福澤研究』九号、昭和四十二年三月、九―一二頁
- (30) 富田正文（聴く人佐志伝）「福澤研究のはなし（二）」『福澤手帖』六二二号、平成元年九月、二四―三三頁
- (31) 『慶應義塾図書館史』（慶應義塾大学三田情報センター、昭和四七年四月）、一六〇―一六三頁
- (32) 平井新「剛強不屈の小泉先生」『小泉信三先生追悼録』（新文明社、昭和四十一年九月）、六六―四頁
- (33) 富田正文「人間の教師 福澤諭吉」『新しい小学校』二卷九号、昭和二十五年九月、四二―四七頁
- (34) 富田正文「小幡甚三郎の死―ワックスマン博士の寄書について―」『三田評論』五五八号、昭和二八年七月、二―五頁
- 頁
- (35) 富田正文「慶應義塾出身人物列伝その一 小幡甚三郎」『三田評論』六一八号、昭和三十八年九月、五二―五六頁
- (36) 富田正文「福澤先生の研究」『三田新聞』一八八号、昭和二年一月二十五日
- (37) 富田正文「福澤研究と私」『三田評論』七三六号、昭和四十九年四月、五二―五五頁
- (38) 富田正文（聴く人昆野和七・桑原三郎）「石河幹明氏を語る（二）」『福澤手帖』六〇号、平成元年三月、一〇―二二頁
- (39) 小池基之「貫かれた実証的精神」『福澤手帖』七九号、平成五年十二月、二〇―二二頁
- (40) 佐志傳「精緻にして平明、内に気概あり」『福澤手帖』七九号、平成五年十二月、三〇―三三頁